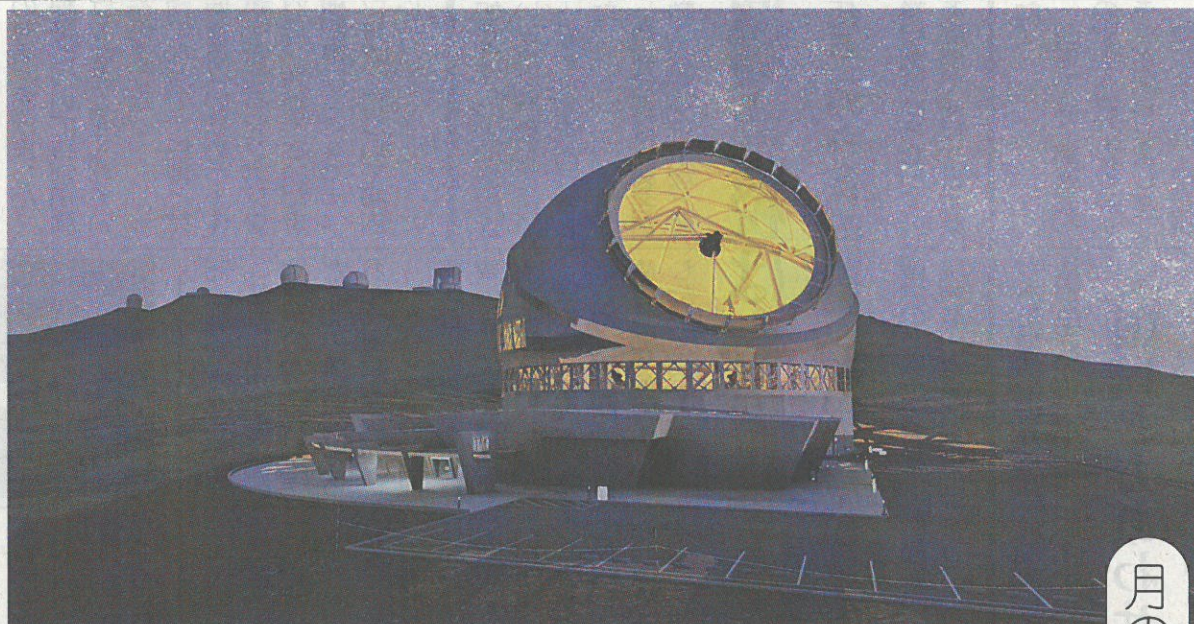




TMT望遠鏡の完成予想図（国立天文台TMT推進室提供）

月の蛍も見えるかな

米ハワイ州マウナケア山頂に口径30メートルの超大型望遠鏡（TMT）を建設する国際計画の推進にむけて、日本が本格的に始動します。国立天文台は4日、日本が担当する望遠鏡の主鏡の製作を始めると発表しました。

TMTの視力はハッブル宇宙望遠鏡の10倍以上。集光力は、すばる望遠鏡（口径8・2メートル）の10倍以上あり、月面からの蛍ほどの光も確認できます。かすかな光しか地球に届かない遠方銀河や太陽系外惑星などの観測に威力を発揮します。直径144メートルの六角形の鏡492枚を蜂の巣状に敷きつめることで口径30メートルの主鏡を実現します。

計画は、米国、カナダ、中国、インドとの

30メートル望遠鏡 建設へ本格始動 国立天文台

協力で進められ、2022年度からの観測開始をめざして来年度からの本格建設にむけた準備が進んでいます。日本は望遠鏡の本体構造、主鏡や観測装置の一部の製作を担当します。今年4月にハワイ州の建設許可があり、日本では今年度に約12億円の予算がつきました。国立天文台は、試作を踏まえ、六角形の鏡の材料の量産、表面加工に取り組みます。

国立天文台の家正則TMT推進室長は「日本が世界に先んじて建設スタートへゴーサインを出したことで、国際計画の中でリーダーシップをとれ、喜んでいいる。第2の地球で生命の兆候を探す研究、宇宙の始まりに銀河が生まれた時代を見るとい研究ができる。すばるの成果をさらに一歩進められる」と話しています。